

## 日本アイアイ・ファンド (NAF) 2022 年度の活動報告



アンジアマンギラーナの苗畑 (ドローン撮影 : RAVELOSON, A. Bruno)

2019年12月に日本アイアイ・ファンドメンバーがマダガスカルを訪れて以来、丸々3年経ちました。アイアイ・ファンドの活動がマダガスカルに送金するだけに限られていた間、マダガスカルの人々たち、全員がコロナに感染したという連絡もあり、大乾燥でアンタナナリボの苗畑は全滅し、アンジアマンギラーナでは野焼きが続いているという情報もあって、現地はいったいどうなっているのか心配でした。

しかし、実際は！この写真！2003年からのアンジアマンギラーナ森林監視員のひとり、クラニさんの苗畑はパイナップルとバナナに守られるように4万本をこえる苗木の畑が完成していましたし、アンタナナリボ苗畑も生産を開始し、マナサムディの植林地でもアカシアの林ができていました。もちろん、林になったのは全植林地23ヘクタールの約一割にすぎず、あきれるほど深い草に覆われた原野に戻ったところも広いのですが、「それでも希望は持てる」というか、「なるようにはなる」というほどの成果はありました。そして、首輪をつけられていたアイアイは元気でした！

このアイアイが一晩に4百メートルの距離を軽々と移動して、ラミーやマンゴーの果実を食べている姿が確認できました。(12月12日)



**写真上：アンジアマンギラーナ村**（中央に小学校と校庭、その先の森はアンジアマンギラーナ川流域）から**保護区中央部を望む**。**写真下：調査基地**（中央白壁の中学校校舎の左下にブロック塀と森に囲まれて屋根だけ見える）から**マナサムディを望む**。（撮影 RAVELOSON, A. Bruno : 2022年12月22日）このアンジアマンギラーナ村の調査基地（タナンバザー＝外人町）を建設した1999年にはあたりは家もない、木々も生えていない裸の丘でしたが、今では家々が建ちならび、しかも樹々にあふれる地区となっています。

しかし、1999年の風景を知る者としては、マナサムディの斜面に森林がないことを嘆かずにはいられません。マナサムディの左（南）斜面の森林でアイアイを捕獲したことがあったほど、マナサムディには森があったのです。しかし、村のまわりにここまで樹々が増えたことはこの4半世紀の間の成果で、私たちの森林保全と植林活動の間接的な影響があったのかもしれませんが。

もっとも、調査基地の玄関前で椅子に坐った日本アイアイ・ファンド代表は「正面に見えていたマナサムディが藪に遮られて見晴らしがまったくなくなった」と嘆いていますが（ま、ほっとけ）。

## 2002年~2022年のあゆみ

2023年1月、日本アイアイ・ファンドは2002年の設立以来21年を越しました。

21世紀初頭の20年間の歩みをごく簡単に振りかえってみます。

### 2002年

1月25日 日本アイアイ・ファンド設立会議

10月7日 マダガスカル治水森林省広報 N°4667/2002 で、マナサムディ山地の一万三千四百八十ヘクタールを「区分森林」から保護レベルが上の「監視森林」に変更。

### 2003年

3月28日 MAF（マダガスカルアイアイ・ファンド：名誉会長島泰三）とマダガスカル国マジュンガ州政府との間で保護区管理契約締結。

6月19日—8月23日 管理活動開始（7月9日保護区管理委託書授与式）。



10月29日—11月9日、日本アイアイ・ファンドマダガスカル第一次視察。

写真：調査基地前で清水さん、近藤弓子さんと荘平さん、岩野園長、倉田社長、庄司さん、近藤達子さん、島代表夫妻（撮影：清水俊介）

11月—12月、境界標識の建設、防火帯設置。

### 2004年

5月27日 チャリティーコンサート開催 「時の箱舟」：庄司龍作曲、バイオリン佐藤野百合、ピエール・バルーとかずみ&マヤ「アミティエ」於：東大農学部弥生講堂一条ホール

7月1日—7月28日 藤江さん（富津市教育委員会）と島代表夫妻マダガスカル視察

写真：保護区の丘で、中央チンバザ公園ジルベール動物部長のち園長の左後ろに藤江さん。



### 2005年

2—4月 「じつに多くの誤算つづき。雨が四月末まで続くとは思わなかった。ふつうは三月までである。これでは、保護区に行けない。

国道4号は首都と西部海岸最大の町マジュンガを結ぶ大動脈であり、晴雨にかかわらず10時間で行ける。アンブンドルマミで国道4号から分岐した国道6号は、西部の低地をま



っすぐに北上してアンジアマンギラーナを通り、北端の最大の都市アンチラナーナまで行く。この低地にはあちこちに難所があり、雨期には泥濘と化す。」

(中略)「四月にはカメレオンは繁殖期に入って、庭には最大六匹のカメレオンが走り回っていた。五月一日の朝、地面を掘っているカメレオンがいた。産卵である(写真)。九時から始まった観察は午後五時にようやく終わる。(中略)かくてマダガスカルの時

は過ぎ、ファンドのホームページ管理人の小林さんとお友達が見え、この時ばかりは楽しく、オレンジなど絞り、グアバのシャーベット、バナナやパイナップルなどマダガスカルの天然の食べ物の楽しみを知っていただこうとした。彼女たちは豪気にもタクシーブルースに挑戦し、前に行くトラックの排気ガスにいぶされて帰ってきた。」(中略)「六人の監視員と三つのコミュニン(村)の責任者への給与と事業委託金を確保して、今年は最小限の事業計画になった。日本での寄付の集まり方が年々減って、今年はずいに年間事業費百九十万円の半額が集まるかどうかという瀬戸際で、これが現実である。印税で保護区の維持など遠い夢である。」

日本アイアイ・ファンド設立3年目ですでに危機だったのだと、21年目に感動してしまった。しかも島は印税でマダガスカルの活動をまかなうつもりだった!

2005年9月には途中でマラリアに倒れた運転手を積んで、北部ダレイナまで島がランドクルーザーを13時間運転し、砂金取りが川を占領している林で黄色のタターサルファカの撮影に成功したものの、全身真っ黒のペリエシファカを探して大失敗。

## 2006年

「ジャパン ヨガ カレッジ」より助成が始まり、「トヨタ環境助成プログラム」助成による保護区周辺村落での衛生管理のための「ヒューマンユール・トイレプロジェクト」も始まった。

1~2月 島代表と井上さん(ケニヤ在住、のちムパタホテル社長)は雨季最中の保護区調査60キロメートルを通りぬけるのに徹夜となった泥沼の悪路に苦しんだ翌朝、井上さん曰く。

「また、思い出ができましたね」。島代表、簡明に答える。「これ以上、思い出はいらない」。

写真:左が井上さん、背景はマナサムディ。

7月 アイアイ・ファンドのホームページ常時更新(小林さん担当)。佐藤さんの漫画が掲載される。

10月7日~15日 赤松さん(写真左端:一人でマダガスカルに来てアイアイ・ファンドにコンタクトした最初の人)と島代表はアンジアマンギラーナ



監視森林を縦断中に山火事に遭遇。

また、この時期に撮影にきていたTBSチームに協力。

11月7日～17日 日本アイアイ・ファンド第二次視察団（米倉さん、松永さん、山吉



さん夫妻と島代表夫妻)がマダガスカル訪問。南部ベレンティ、西部ムルンダバを回り、アンジアマングラーナ監視森林に達した。

写真：視察団一行、保護区境界第一標識（白矢印）前に立つ。

**2007年** アンジアマングラーナのネズミキツネザルは新種と判明した。



(絵：佐藤純子さん)

10～11月 現地および北部調査。写真：新種ダンフォスネズミキツネザル。

### 2008年

3年間継続した「トヨタ環境助成プログラム」によるプロジェクト完了。9月 正木さん（巨匠カメラマン）と島代表は撮影機材など合計75キロの大荷物をマダガスカルに運び、10月には酒井さん（中央公論新社）も現地入りして、アンジアマングラーナでのアイアイの撮影に成功。



写真左：酒井さんは自分のテントに入ってきたテンレックを掌に載せる。右：街道でバナナを楽しむ正木さんと酒井さん、国道分岐点アンブンドルマミにて。バナナとテンレックとカメレオンは、マダガスカルに遍在する。

DVD『森を守る』を完成し、アンジアマングラーナ小学校でお披露目。

ラミー植林計画発動:スアピナ事務所とチンバザザ公園に1998年発芽のラミーを植樹。

**2009年** マダガスカル政変。臨時政府が国際的に認められず、政府間援助中止。

7月 島代表、岩野園長とジャイカ短期専門家としてマダガスカル視察。

**2010年**

1-2月 川又さん、ジャイカフ（農水省外郭団体）派遣で保護区内植生調査

2-3月 赤松さんと島代表、マダガスカルへ。ラミー種子2000個収集（アンツイヒ北のアンラミベ産）により苗畑建設（首都と現地で）。

10-11月 島代表、岩野園長、阿部さん（フォトグラファー）によるマダガスカル北部から各地視察。北部は日本大使同行。赤松さんのラミー苗1500本発芽。うち60本を首都へ。ラミー1000本、アカシア2000本を水源地域マナサムディに植林（植林地の始まり）。

**2011年**

11月26日-12月10日 島代表現地調査。

「12月6日午前7時、ディエゴ発。午後3時、アンジアマングラーナ着。ジルベールさんの出迎えでクラニさんの苗畑に行き、ラミーとアカシアの苗数百本を見て、第10境界



標識まで登り、500本のアカシア植林地を見た。

夜になってキャンプの外に出てみると、南空の雲は盛大に爆発する稲妻に包まれ、暗闇の中でさえ手前の積乱雲を不気味な高さまで照らし出していた。いずれこちらに来ると思ってテントに入ったが、案の定、午後9時から雨になった。雨は強くなったというよりもテントのシートを突き破るほどの勢いとなり、雨と雷ですさまじい音になっ

た。長い雨だった。テントの床にぶよぶよした感触が生まれ、雨がテントの下に回りこんでテントの床が揺れ、ついにテントは水に浮かんでしまった。」

**2012年**

元旦 相原さん（パリ・アイアイ・ファンド代表）ルワンダから連絡。ゴリラ計画始動。



6月 ブルノーさん、アンジアマングラーナで作業指導。DVD『知られざる熱帯大陸マダガスカル』完成。

6月～7月 阿部さんと島代表はルワンダ、ガボンからマダガスカル取材。

7月 ジルベールさんがチンバザザ公園園長就任。

11月 近藤さん、平松さん

と島代表夫妻、マダガスカル北部視察。（写真：レッドチンギにて笑いころげる三人娘：君たちを楽しく過ごさせるために、ほとんど苦労した誰かを忘れないようにね。）

## 2012年までのラミー植樹の経緯

1998年12月 ラミーの種子約50個が発芽。

2001年発芽したラミー苗をチンバザザ動植物公園に30本、スアビナ事務所に8本植樹。

2009年 ラミー種子100個収集し、苗畑を作るも発芽せず。

2010年 ラミー種子5000個収集。苗畑整備。アンジアマングラーナで1500本発芽。うち1000本を植林。アカシア：2000本を植林。

2011年 ラミー：アンタナナリヴで170本発芽（3000個のうち）

アンブヒジャヌ村に60本を植林（石原さんによる「マダガスカルで一番美しい村」プロジェクト）。アンタナナリヴ近郊に150本。アンジアマングラーナ保護区に540本。調査基地周辺に100本植林。アカシア：アンジアマングラーナ保護区周辺に870本を植林。調査基地周辺に60本を植林。

苗畑の整備：ラミーの種子830個、アカシアの種子3280個の植え付け。

2012年 アカシア2000本、シトロン100本をアナイジャヌ村内に植林。苗畑の再整備：ラミー種子5000個収集。

## 2013年

佐藤純子さんの『MISAOTRE!マダガスカル改訂版』（1,300円+税）堂々発行！

いろいろな助成金に応募し、ことごとく落選。

11月11日～12日 島代表と阿部さん、マルジェジ国立公園でキヌゲシファカ撮影。

11月16～17日 アンジアマングラーナ川源流域でアイアイを発見。植えたラミーが100本以上、藪の中から伸び出して緑の葉を茂らせていた。

## 2014年

この年も緑化協会、トヨタ財団などの助成金は軒並み落選。しかし、日本アイアイ・ファン드는、アンジアマングラーナで2～3月と10、11、12月に、マダガスカルアイアイ・ファンドとチンバザザ動植物公園は5～6月と7～8月に、現地で活動。

3月にはアカシア1635本、ラミー802本を植樹し、同時にラミーとアカシア（5000本ずつ）の苗畑を作る。

石原さんのアイデア「マンゴーを植える」は画期的。これまで植樹の対象は、ラミー、アカシア、シトロンそしてパパイヤでした。しかし、マンゴーは火に強く、果樹で日陰を作り、水源となります。ラミーの苗作りの募金を始める。

## 2015年

第一、国土緑化機構より「マダガスカル、アンジアマングラーナ監視森林とその周辺地域での植林」が助成され、3ヘクタールにラミーなど1800本を植える。

第二、上野動物園のアイアイ1頭が「ダレル野生動物保全トラスト」に送られた（東京新聞、2015年9月9日朝刊）。

「ダレル野生動物保全トラスト」は、イギリスのジェルジー諸島にジェラルド・ダレル（『積みすぎた箱舟』の著者）が開設した施設で、世界で初めてアイアイの飼育下での繁殖に成功しました。この本に出会ったことが、島の生涯の方向を決めました。

2014年、アメリカのサンディエゴ動物園に上野動物園からアイアイが送られたのに続く第二弾です。マダガスカルのアンジアマングラーナ出身のアイアイたちが、日本を経由して世界に羽ばたくのを見るのは、実に壮大な風景です。

## 2016年 バオバブ全種の花とシファカ全種を見る島 30 年来の悲願達成！

1月13日～2月4日 マダガスカル航空がバンコク便を廃止したために、前年12月に予定した植林事業のため翌年に延期して出発。しかし、雨季の真ん中で洪水に遭遇（この写真は見せたかったなあ！）。

5月30日～6月20日 東京動物園協会「野生生物保全基金」の助成を受けて遠藤教授（東大総合研究博物館）と守亜さん（造形作家）と島代表、マダガスカル北部調査。

9月4日 「マダガスカル研究報告会」東大総合研究博物館展示室。



写真：ひかる式植林、サッチャナヤシの葉で苗を守る。

10月15日 濱口光さんに特殊任務を要請。任務目的は自然保護区でもない飼育施設でもない、しかし、その両方の特徴を兼ね備えた施設、すなわち広さのある「準自然繁殖管理地」をマダガスカル

カル現地に創設することです。つまり、アイアイの保護に新しい時代が始まるのです。

11月26日～12月19日 島代表、植林と新計画候補地選定のためマダガスカルへ。

## 2017年

2月4～5日 「マダガスカル国際シンポジウム」：葉山なる総合研究大学院大学にて。

国土緑化推進機構の「緑の募金公募事業」助成を3年連続で受け、2015年度の3ヘクタール、2016年度の5ヘクタールに続いて2017年度にも5ヘクタールに植林しました。

9月4日～13日 デューク大学のレムールセンターで4頭も死んだアイアイの飼育状態を確認し、ニューヨークのブロンクス動物園でマダガスカル館とゴリラの森を体験。

9月25日～10月24日 現地の植林はメトド・マンギラナ（Methode Mangirana ひかる植林法）を継続。ベチブカ川南方へ進出した竹田・ブルノー組からは、新しい大森林の



情報。

## 2018年

「緑の募金公募事業」助成に4年連続で応募し、2018年も5ヘクタールに植林しました。

7月18日～8月1日 愛ちゃん、そのママと祖父母、そして下関の近藤さんの五人組でマダガスカルへ

写真：2017年浜口植林の中から看板前に並んだ愛ちゃん一行を撮影

東京動物園協会「野生生物保全基金」の助成に3年目の応募で落選。ベチブカ川南岸の「誰も見たことのない大森林とジャイアント・アイアイ調査」は次の世代に夢をつなぐ。

12月13日 国道沿いでのもみ木用植樹。ファンンプタナ学園協力。

**2019年** 「ひかる植林地」は2019年12月の大火災から生き残り、カシュー結実。

カシューとパイナップルを合計2000本保護区内に植え、集落周辺の三地域では合計1ヘクタール以上植林。ラフィア、竹プロジェクト開始。

11月29日～12月20日 アナラランベ（保護区内キャンプ地）でアイアイ観察。

12月末、メンフクロウ親子がアンタナナリヴ事務所のラミーを宿にする。

アイアイの子ども（首輪のまま放置されていた）の救援を要請。

## 2020年

3月4日 コロナ緊急事態宣言。17日 石原さん葬儀。24日 オリンピック延期決定。  
20世紀後半から21世紀初期とは、すごい時代に生きているものだ。ヴェトナムの勝利とソ連邦の崩壊とドイツの統一、チェルノブイリの爆発とフクシマ、911とイラン、北朝鮮の水爆開発、そして今回のコロナである。問題は出尽くしたのか、これからなのか？（2022年のウクライナ戦争は、この時には予測できていない）

4月20日 マダガスカルでコロナ新薬発表。マダガスカルからは死者はゼロだが、交通が途絶え、苗が全滅と報告あり。

5月24日 『マキベと愛の物語』（のち『レムリア物語』と改題）にとりかかる。

9月14日 アイアイ・ファンダ拡大理事会リモート会議。

11月17日 マダガスカルから送金要請。30日 三菱UFJ銀行では送金できず、ウェスタン・ユニオンを経由して送金。送金情報をマダガスカルに送って2時間後に「入手」と返事。「日本の後進国化についての一考察：国際化に対応できない日本大手企業と政府」

## 2021年

1月13日 マダガスカルへ植林関係費用などの送金。

2月10日 宇部市ときわ動物園でマダガスカル展示会開催（2月末から5月）。20日1980年代映像をデジタル化。1巻45分の45巻分。26日、ブルノーさんから報告第二弾ではドローンでの撮影。



写真：マナサムデ  
イ山地の植林、雨季  
のサッチャナヤシが  
きれい！（2021年3  
月10日：ドローン撮  
影 RAVELSON, A.  
Bruno）

3月27日 宇部  
市マダガスカル植  
物展会場でのズー  
ム会議。

4月12日 マダガスカルへの送金。ララさんもブルノーさんもコロナに感染して、ララさんは呼吸困難。ブルノーさんは仕事もなく、薬も買えないと。14日、マダガスカルのコ  
ロナ感染者支援のためアイアイ・ファンダメンバーから寄付。ほんとうにありがたい。

5月25日 NHKBSの制作会社から安田講堂関係で出演依頼。「家族にも出てほしい」と。即座に断る。19日 ブルノーさんから「金をまたすぐ送ってほしい。妻の調子も悪く、あらゆるものを売り払って生活している」と。

6月10日 マダガスカルへ送金。ララさんたちのコロナ感染はなんとか治癒した。

7月1日 緑化協会より2021年度補助決定通知。7日 島代表はJTS 学術賞を受賞。佐々木伸雄先生（元東大教授、マダガスカルに行ったりりの主治医）の推薦。

9月23日 宝島社が新聞広告で「自宅療養などという医療責任を放棄した政策が行われるようなひどい国になってしまったのは、なぜか」と。この国はほんとうにダメかも。30日 宇部市ときわ動物園のビデオ講演用資料編集。

10月22日 NHK 番組『チコちゃんに叱られる』で「親指が太いのはなぜ？」放映。



アンタナナヴ・スアピナ事務所のラミー：左2008年、中央左2012年、中央右2017年、右2022年  
2022年のラミーは下枝までの高さが10年前より明らかに低くなっている。これはどういう理由なのか？後ろの塀の白い線と人物が基準で、右端は垂直がゆがんでいるので、塀の高さを木の後ろでそろえた。

## 2022年

1月19日 赤松さんへ「マダガスカル情勢」報告。

4月28日 メディアマジックの創立25周年記念絵皿を受け取る。里見社長は1994年に島とマダガスカルで出会ったという縁だけで、ここまで付き合っていていただいている。

5月14日 日本アイアイ・ファンド2021年度活動報告リモート会議

5月18日 井筒監督より『安田講堂1968-69』をもとに映画化したいとの連絡があり、お茶の水で初会合。2021年1月5日に「戦後学生運動の総括を始めた」と記録したこちらの準備状況を知っていたかのような提言。実現すれば「われら最後の戦い！」（愛媛県愛南町の山崎さんの言）と勇み立つ。（あぶない、危ない！）しかし、これが1961年からの島の日記とメモのデジタル化にまで及ぶとは！

6月8日 遠藤教授の案内で東大構内を監督と回る。理学部二号館の部屋を覗くと助手の若者が「人類学教室をご案内しましょうか？」と顔を出した。久しぶりで、いいやつの方の東大生に会った気がして、なんだかうれしい。

10月3日 『シェクスピア劇の名台詞』36の第35『テンペスト』第四幕一場のセリフ「われらは夢と同じ材料でできている。われらが小さな人生は、眠りひとつでまとめられる」を暗唱。今、この歳にならなければ、誰がブルータスの「やつには死んでもらおう」を暗唱するだろうか？この歳でなければ、オセロの「我慢の限界」という恐ろしいほど陰鬱な思いを暗唱することはできない。

『レムリア物語』は全面的に書き直し。全7巻では長すぎる。

10月19日 井筒監督の事務所で日大全共闘の山崎さんと太郎良さんを交えて日大闘争

の話に花が咲く。日大全共闘は警察無線を盗聴していて、それによると安田講堂攻防二日目には警察の催涙弾がなくなり、お茶の水から本郷への道を遮る機動隊もいなかった。われらが当時からこのように知り合っていたらと（もっと危ない！）。

安倍なる保守勢力中核を打ち抜かれたあとの自民党総裁は、根本的に見識もなくカルト集団への対応が分からないから、昨日と今日の国会答弁が正反対になっていた。かの山上憶良の末裔は、この暗雲の核を打ちぬいて青空があることを日本帝国臣民に見せつけた。

10月20日 マダガスカル行きのためにワクチン接種3回目。これが悲惨な連鎖を産む。頻尿が始まり、一日27回の頻度。10月31日 正木さんからマダガスカルへの大型カメラと三脚を受け取る。マダガスカルの友人たちの自活道具としてもって行く。

11月8日 皆既月食。マダガスカル土産にあめ玉の大袋など買う。（これは大当たり！）

11月22日付け 日本アイアイ・ファンドと友人へのメールから

「2019年の12月以来ですから、丸々3年目のマダガスカルで少々緊張しています。

感覚を取り戻そうと、2019年の記録を読み直しています。3年前はいくつもの仕事を同時にこなして、実にさまざまな企画を考え、それを実行しようとしてさうとう疲れ果てていたことがよく分かります。しかし、今回は少し手を抜いて、できることをやることにしたいと思っています。

幸い、アンタナナリボに H さんが赴任されて、島が到着するまでの現地の日本アイアイ・ファンド活動の後ろ盾になっていただいています。H さんはアフリカ、マダガスカルでの経験が広く深く、かつて島がマウンテンゴリラの名付け親になった時、ルワンダでもお会いしました。人の縁はどこでどうつながるのか分からないものです。」

2022年12月11日付けの連絡から

「体調の悪さはコロナワクチンの後遺症かもしれませんが、もうひとつは明らかに3年ぶりのマダガスカル行にかつてないほど興奮していたためです。長距離の飛行機体験への不安もあり、かつ現地での長距離自動車移動と熱帯低地の真夏の暑さへの不安も募っていました。（中略。）イヴァト国際空港は様変わりしていました。ボーディング・ブリッジ（搭乗橋）ができて、機内から滑走路に降りる手間がない。近代化だが、面白味がなくなった。（写真：アンタナナリボ国際空港新建物の外観：タクシーが列を作っている。）



乗橋)ができて、機内から滑走路に降りる手間がない。近代化だが、面白味がなくなった。（写真：アンタナナリボ国際空港新建物の外観：タクシーが列を作っている。）

空港の換金窓

口で日本円を現地通貨に換えてびっくり。1円=22 アリアリ。日本円の凋落は恐ろしいほどで、このレートは20年前に戻った。



アンタナナリボの大通りの並木が大きくなって、マダガスカルの自然の力を感じさせる。人口増加（2021年2892万人：1990年には一千万人。オーストラリア人口以上となる）による経済拡大は、富裕層と混雑とを拡大したが、道路は1980年代のラチラカ社会主義政権時代にもどり、主要道路までガタガタ。

写真：ラミーの木にすむメンフクロウ  
（左：2022年撮影 RAVELOSON, A. Bruno、右  
2016年撮影島：たぶん、同じ個体）

アンタナナヴのスアピナ事務所の建物は頑丈そのもので、暴風雨はあるけれど乾燥している風土には日干しレンガ作りは適している。苗畑は整備されていて、大きなタンクを二つそろえて給水施設も完備している。

とにかく住む場所は確保できたと思ったら、たちまち停電。だが、赤外線探知の非常用ライトは3年たったにもかかわらず、三つのうち二つまで作動！『これで停電にもなんとかなる』と安心。

11月28日 アジャさんとアンタナナリボ中心部にあるアクサ・テニスコートで会い、現地の植林、苗畑、作業員の状態を聞く。

11月30日 アジャさんがアンジアマングラナから運んできたラミー、カシュー、ラフィアの種子を選別し、乾かす。太陽電池、ニッケル電池の充電器を確認。午後5時、雨となり、あわてて太陽電池、ラミーなどを取りこむ。たちまち停電。

12月1日 アクサでジャガランダの雨に会う。このしずくを忘れては、アンタナナリボの初夏の風情はない。午後、現地調査用品のとりまとめ。到着したばかりなのに、もう出発かとフラフラ。午後5時、雨。停電。仕事にならない

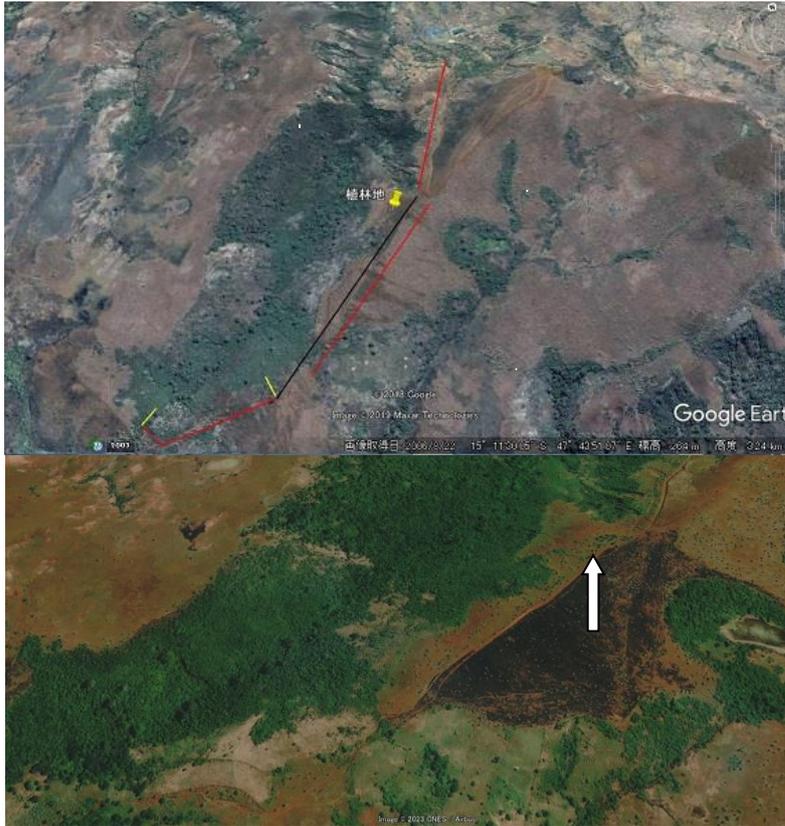
12月3日 午前中、運転手のボスコさん来たり、車の点検。ネズミ対策にはコショウをエンジン室に撒くといいとか。さらにアジャさん来たり、苗の積みこみ始まる。

アナラケリでカメラにつなぐコンピューターが見つかったとのことで、タクシーを調達してララさんとその息子といっしょに出発。

これがひどいタクシーで、豪雨の中で浸水！島の長いマダガスカル生活でもタクシーの床から水が吹き上げたのは2回だけで、しかも第一回目は1983年だった。つまり、40年を隔てて、マダガスカルは社会主義時代に戻ったのだった。

12月4日 あまりの疲れで3日の夕方は午後5時の停電とともに寝て、零時に起きて旅行用荷物をまとめて、また眠る。午前5時半出発。（悪路、興奮、そして熱波）12時間後にアンジアマングラナにたどりついたが、前日の排気ガスによる喉の痛みもあり、体はぼろぼろになっていた。ホテルのベッドに倒れこむ。翌12月5日はまったく起きあがれない。

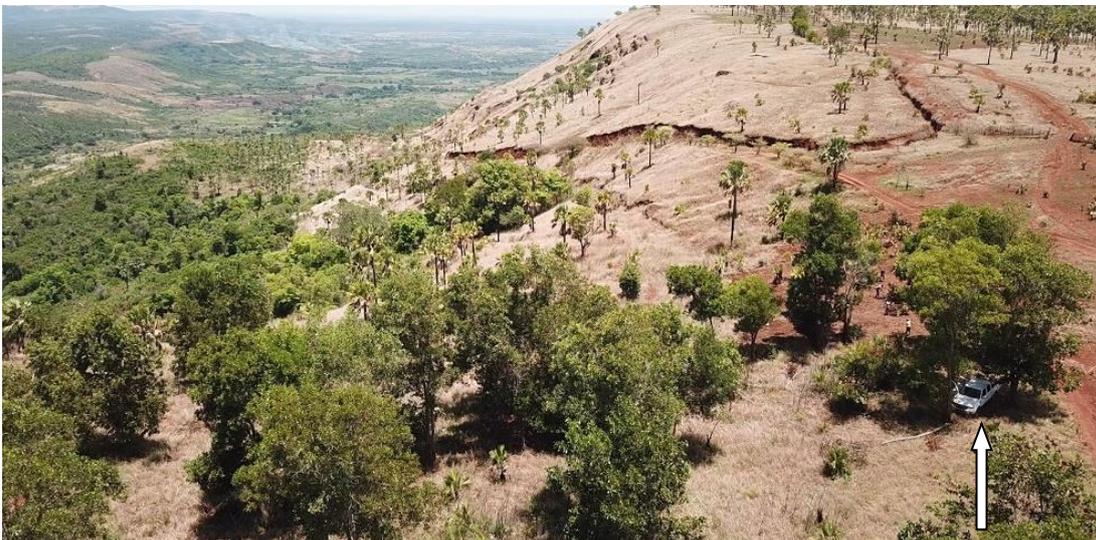
12月6日、アンジアマングラナ村に行くと、苗畑責任者のクラニさんはサソリに刺されて療養中。苗畑をまわり、マナサムディ頂上の植林地へ登る。苗畑と植林地の現状は『残るべきところは残った』というものだった。



上 2019 年植林地全景：  
 下 2022 年植林地全景：上の写真のピンあたりに下の白矢印で示す。アカシアの緑が点状に広がっている。手前の道路から南側は焼かれている。（グーグル写真より）

植林地に木々がまったくなくなっていることも想像していたけれど、そうではなかったのは救いだ。特にアカシアは大きくなっていて、大森林とはいかないが、とにかく 2 ヘクタールほどは林となり、その間で小さなラミーやバオバブが

ところどころで頑張っていた。植物が偉い！



写真：植林地から彼方にかすむアンジアマングラーナ村を望む。右に斜めに斜面をえぐる線がタクシーブルースの道路で、手前右すみのアカシアの下の子（白矢印）の近くを通っている。ここが保護区南西の端 No.10 境界標識地点である。植林したアカシアは上空から見るとこれほどの大きさになって点々と続く。（ドローン撮影 RAVELOSON, A. Bruno : 2022 年 12 月 22 日）

12 月 7 日 午前 9 時、調査基地に現れたブルノーさんは意気軒昂！「アイアイか、任せておけ！」と。島代表とボスコーさんはそのままアンタナナリボへ。アジャさん、ブルノーさんは現地に残り、アイアイの救出と植林、および調査基地の整備を担当した。



写真：境界標識 No.10（白矢印）と 2010 年植林のアカシア林を背景に、道路沿いの柵用ブーゲンビリア植林のために穴を掘る作業員と撮影中のブルノーさん。（12 月 13 日：Rajonson Hajanirina）



写真：2017 年植林地（浜口植林）から 2010 年植林地（No..10 境界標識）方向を見たところ。左側（北）の平らな丘は保護区内（2022 年 12 月 13 日：ドローン撮影 RAVELOSON,A. Bruno）。大きな木はすべてアカシアで、その間にラミー、マンゴー、カシューが生き残り、道路沿いのバオバブ、サイザルが少し見える。ここに見えている全域が今回再植林した地域である。

12 月 8 日 島代表たちの帰路、中央高地へのつづら折りを登り切ったところで、タクシールース同士の衝突現場に会う。一台は正面ガラスがこなごなで、一台は崖下に転落していた。ボスコーさん『ジャンダルム（国家警察）が来ているのは死者がでた証拠』と。



『生きて帰る』が、今回の目標だった。正午、アンタナナリボ着。」

2022年12月12日アナラランベキャンプ地に現れたアイアイ。首輪が確認できる。元気だった！（写真撮影 RAVELOSON, A. Bruno）

12月12日 アジャさんに連絡する。彼は明日アンタナナリボ着、ブルノーさんは15日着とのこと。彼らは首輪をつけたアイアイを確認し、写真も撮った。

12月14日 これまでいろいろお世話になったオピタル・スールの平間シスターへ、事務所に積んである本をまとめて段ボール箱3個にして、あめ玉の大袋を添えてクリスマスプレゼントにさせていただいた。

夕刻、フクロウの鳴き声が聞こえたので、外に出て撮影しているともう一羽が飛んできた。彼ら夫婦はいつもいる。深夜、しめやかな雨。

12月15日 午前10時、ブルノーさん、アジャさんの報告を受け、データを取りこみ、支払い。彼らは島代表の日程に合わせて、その限度まで精いっぱいの仕事をしてくれた。それはこれまで植林してきた主要な部分の再植林であり、No.10 標識から2010年、2015年以降2017年浜口植林地とその先の2018年植林地までの間の長径1キロメートル、ほぼ10ヘクタールに及ぶ植林だった。これを支える苗木、人力、牛力、そして人の輪があった。

12月17日 島代表帰国。赤いサザンカが盛りだった。今回のマダガスカル紀行はすべてフィードノートに書いたもので、これをパソコンデータにする。三人の撮った写真、ビデオの整理とともに大変。12月30日、マダガスカル報告文書化開始。



写真：  
2022年12月7日 アンジアマンギラーナ村タンバザー調査基地に集まった強者どもと島。

左からブルノーさん、ボスコさん、島、アジャさん。この四人が元気

なうちはまだまだ仕事ができる。しかし、三人は島の息子の年齢！



写真：クラニ苗畑で2010年に芽吹いた赤松ラミーが林になった（2022年12月6日撮影：島）

アジャさんが手を置いている木とそのまわりの幹のまっすぐな樹々は、すべてラミーです。10年で柱になる材木がとれるほどの林になりました。河川流域、湿地近くに植林すれば、20年間では立派なラミー森林になります。熱帯の強みです。

アンタナナヴ事務所のラミーはすでに24歳となって、もうすぐ結実するでしょう。そうなれば、自然林地域では希少になった固有種のラミーをアイアイ・ファンドの苗畑で自給して、マダガスカル全国に供給するという遠大な見通しもたつでしょう。

この苗畑のまわりに種子を埋めたラフィアヤシも3年目にはしっかり芽吹いています。

カシューとパイヤはすぐに換金できると村人は色めきたちましたが、これは3年間でみごとに全滅しました。しかし、着実なクラニさんの苗畑は今では4万本の苗を有するまでに拡大しました。

（ラミーの巨木化と下枝の降下について：2023年1月15日のアイアイ・ファンドの会合で、山吉監事より重大発言。「木が沈んだのじゃないか？」

ここは丘を階段状に削ってできた住宅地です。この塀の先の下敷地との高低差は5メートルほどあり、ラミーを植えた場所は埋め土をした地域です。ラミーの重さは5トンを超すでしょう。皆さんはどうお考えになりますか？)

**2023年3月4日（土曜日）午後2時**

**アイアイ・ファンド活動報告会** 東京大学総合研究博物館会議室。

**懇談会**同日5時から本郷三丁目「麦」（会費2500円）。

#### 寄付口座

郵便振替00130-6-92156 NAF日本アイアイ・ファンド

東京三菱銀行春日支店062-1047561 NAF日本アイアイ・ファンド島泰三

発行 日本アイアイ・ファンド 〒113-0033東京都文京区本郷5/3/12